

ゴーリキイに関する覚え書

<コロレンコとの交友をめぐって その2>

松 本 忠 司

1. 「大学」時代
2. 放浪と模索の時代
3. 作家的出発の時代 (以上前回掲載)⁽¹⁾
4. 新聞記者時代
 - 1) 1895年前半 (今回掲載)
 - 2) 1895年後半以降
5. アカデミヤ事件
6. 大革命期
7. 晩 年

4

B. Γ. コロレンコの熱心な忠告と説得を受け入れて、ゴーリキイは、ニージニイ・ノーヴゴロドにおける不安定な貧窮生活を清算し、専門的文筆人の生活を志ざしてサマーラ市へ赴くことになった。1895年春のことである。

サマーラへの出発の時期についてゴーリキイ自身は研究者たちの質問に答えて、「きっと95年4月でしょう、路上の水溜りにはまだ氷が張っていた⁽²⁾」と語っている。しかし、実際には、ニジェゴロド県知事バラノフがモスクワの警視総監に、「1889年11月20日より秘密監視のもとにあるアルクセイ・マクシモフ・ペシコフは2月20日モスクワに出発し、そこからサマーラに向かう予定である」と報告していること、サマーラからのゴーリキイによるコロレンコ宛て書簡第1信が3月初めに発送されていること、3月1日付《サマーラ新聞》に

(1) 小樽商大人文研究第20輯。

(2) И. Груздев. «М. Горький в Самаре». В кн. «Горьковские чтения» М., 1959, с. 336.

はゴーリキイの筆になる記事が現われていることなどから、遅くも2月末にはサマーラに到着していたと考えられる。

ゴーリキイが、コロレンコの紹介によって勤めることになった《サマーラ新聞》の沿革はあらまし次のとおりである。——この新聞は80年代にノヴィコフ(И. П. Новиков)によって創立された。この人物は、驃騎兵あがりであったが、家業の印刷工場を経営する一方、出版に手を染めたり、市会議員を勤め、市民劇場の管理者、劇団主、俳優をも兼ねるという人で、町の名物男の一人であったらしい。演劇にたいする関心がとりわけ強く、この時期の新聞紙面は演芸欄が大きな比重を占めていたという。1894年、《サマーラ新聞》は青年実業家コスチューリン(С. И. Костерин)に買い取られた。当時、社会生活の全般的活況に関連して、地方都市では《県内通信》に類する小型新聞の刊行が盛んになり、そうした新聞は多かれ少なかれ自由主義的傾向を帯びていた。もちろん、地域の検閲官に許される範囲を超えることは認めれなかったが。《サマーラ新聞》も新しい経営者を迎えてそうした傾向を帯びるようになった。ことに、コスチューリンが採用した秘書のアシェジョフ(Н. П. Ашешов—1866～1923)は、《危険思想》のゆえに首都を追放されたジャーナリストで、事実上の編集者として精力的に新聞の再編成を進めていた。彼はヴォルガ中流地方における傑出した文化的指導者としてのコロレンコの存在に注目し、再三手紙を送って、新聞への寄稿と助言とを請うていた。こうして、コロレンコがゴーリキイをアシェジョフに紹介することになった。

ゴーリキイの《サマーラ新聞》への寄稿はすでに94年10月から始まっていた。10月後半に短編『二人の浮浪人』(Два Босьяка)が4回、12月に『わたしの道伴れ』(Мой спутник)が6回にそれぞれ分載されている。95年には1月に短編『塩の上で』(На соли)が2回に分載、そしてサマーラ到着前後と思われる2月26日付の紙上には、『美しい女』(Красавица)と『結着』(Вывод)という二つの小篇が掲載されている。

ゴーリキイの《サマーラ新聞》入社第1日の模様を、同社の事務員であったイワーノヴァ(Е. С. Иванова)は次のように伝えている。「ある日、私が出

勤して編集室に入ると、一人の男が新聞の上にかがみこむようにして、机に向かっていました。誰なのかわかりません。顔は髪の毛ですっかりおおわれています。私が入って、扉がボタンと音をたてると、彼は跳び上るようにして、髪をうしろに掻きやり、私をみつめました……私は恐しくさえなりました。病人によくあるように、蒼白な顔で、瘡せこけて——やつれています。やがてゴーリキイだと知りました。そして、よく見ると、まだとても若くて、顔には髭がなく、黒いジャケットを着ていて——みすぼらしい服装です。……彼に新聞の切り抜きの仕事が与えられました、その分として月50ルーブリ、短編小説に対しては1行2¹/₂ コペイカ支払われることになりました……⁽¹⁾ここで述べられている「新聞の切り抜き」の内容について彼女はさらにつづけている。「彼に課せられた仕事は首都の新聞を切り抜いて、それに短評を加えることでした。毎朝最初にする私の仕事はアレクセイ・マクシモーヴィチの机の上に、仕事に必要なものをきちんと用意しておくことです……私たちの所へ送られてくる首都や地方のあらゆる新聞をきちんと選り分け、ゲラ刷りに似ている新しい、細長い紙を重ね、紙紐を揃え、ハサミやノリがいつもの場所にあるようにしておくのです……アレクセイ・マクシモーヴィチが切り抜きによって構成する欄は《新聞の頁から》(По страницам газет) および《出版界だより》(Толки печати)とよばれていました。それらは毎日紙面に載って、《サマーラ新聞》の注目を浴びている欄でした。彼はまた毎日《記録と素描》(Очерки и наброски)を書きました。」

ゴーリキイはサマーラに移る1年半前からヴォルガ地方の新聞に関係をもっていたが、それはもっぱら文芸創作の寄稿者としてであった。しかし、ここでは、文芸家としてばかりでなく、専門的ジャーナリストとして評論活動を開始することになった。サマーラ滞在の14カ月(95年2月から96年4月まで)のあいだに、彼は《サマーラ新聞》紙上に約30篇の短編小説と詩篇のほか、上記の《記録と素描》欄に約440の時評的小品論文を発表している。さらに、95年

(1) Е. Иванова. «Молодой Горький». В сб. «М. Горький в Самаре». М. 1937. с. 221~222.

7月14日以降は、辞任したグーセフ(С. Гусев)のあとを引き継いだ《ちょっと一言》(Между прочим)欄の185篇と、独立した主題の8篇の小論文を加えなければならない。また、一時的にはあるが、95年秋には数週間にわたってゴーリキイが編集者としての仕事を代行している事実もある。

新聞社におけるゴーリキイについてイワーノヴァは語っている。「彼はきちんと9時前に出社しました。机について郵便物に注意ぶかく眼をとおしてから、仕事にとりかかるのでした。彼のもとにはよく訪問者がありました。時評作者を訪ねる人の常として、さまざまな横暴にたいする苦情を携えてくる労働者、勤め人、一般に貧しい人々を、アレクセイ・マクシモーヴィチはいつでもうちとけた態度で、丁重に応待する⁽¹⁾のでした。」

ゴーリキイは、新聞における自分の任務を、あらゆる無権利の状態に苦しむ「小さい人々」の権利を擁護し、地方都市の小市民社会によどむ悪習、不正、生活の畸型化を摘発し批判することとして理解した。社会時評的活動は、全ロシア的規模において社会生活に派生するもろもろの現象を広汎に、本質にまで深く洞察し、それを土台に緊急の課題を選択し、即時に解答を与えなければならない。したがって、若きゴーリキイは当面の問題の解決にあたって、しばしば逡巡・動揺をも体験しなければならなかった。こうした時期に、コロレンコの存在はゴーリキイにとってかけがえのない貴重なものであった。

当時を回想しながら、ゴーリキイは書いている。彼が新聞において社会時評活動を始めたとき、「コロレンコは手紙をよこして、私のくだらぬ仕事ぶりを嘲笑的に、感銘ぶかく、厳格に、しかし——つねに親切に批評してくれた。⁽²⁾」

ゴーリキイとコロレンコの、30年に及ぶ交友の全期間を通じて、サマーラ時代にもっとも多くの書信が交わされている。⁽³⁾

(1) Там же. с. 222.

(2) «В. Г. Короленко». М. Горький: Собрание сочинений в тридцати томах. том 15, Москва, 1949~1955, стр 42. (以下 С. с., т. 15. с. 42 と略記する。)

(3) この時期には、ここに掲げたものよりも多くの書簡が交わされたようである。ゴーリキイは回想記のなかで「……それはよい手紙だった。しかし、家宅搜索をうけたとき、憲兵に没収された。そして、それは他のコロレンコの手紙とともになく *

ゴーリキイからコロレンコへ

コロレンコからゴーリキイへ

- | | |
|----------------------|----------------|
| 1. 3月初め (25頁) | |
| 2. 3月15日 (27頁) | 1. 3月22日 (26頁) |
| 3. 4月12もしくは13日 (29頁) | 2. 4月15日 (31頁) |
| 4. 4月20日頃 (33頁) | 3. 4月23日 (33頁) |
| 5. 4月末 (35頁) | 4. 5月12日 (39頁) |
| 6. 6月23日 (40頁) | 5. 7月4日 (43頁) |
| 7. 7月上旬 (以下次回) | |
| 8. 7月7～10日 | |
| 9. 8月初め | 6. 8月7日 |
| 10. 8月10～11日 | |
| 11. 10月3日 | 7. 10月19日 |

ゴーリキイはサマーラからコロレンコ宛の第1信を、彼がこの町に到着して日も浅い3月初めに書いている。この手紙のなかで、ゴーリキイは「出版者は仕事を愛していて、銭惜しみしません。検閲は今のところ緩やかです。編集長アシェジョフは非常に賢明で精力的な人のようです。」と書いて、新しい環境にたいして一応好感を抱いている様子を伝えるとともに、次のようにコロレンコからの助言と援助とを求めている。

「私は《記録と素描》を担当しています。あなたのお考えを聞かせていただけませんか、事件の取り扱い方はいかがでしょう？事件の価値自体は？調子は？もっと生き生きと書かなければならない、とアシェジョフは言います。

私は努力しています。しかし、どうやら、これは私の専門ではないようです。ときどき、俗っぽい、冷笑的な——例の《うちの母さんの息子》風の調子に落ちこんでしまいそうな気がします。

そうではありませんか？抑制してみます。すると結果は——ぱっとしませ

* なつてしまつた」(C. c. t. 15)と書いている。また、コロレンコのある手紙には「前の二通のほかに、さらに何か書いたとのことですが、私は受け取ってません」(A. M. Горький и В. Г. Короленко)とある。

ん。

あなたの助言と批判によって私ならびに新聞を援助してくださるよう、切に、切にお願いいたします。⁽¹⁾」

ゴーリキイは、社会時評の意義を高く評価し、自分の責任を強く感ずるとともに、この責任を十分に果たしうるかどうか不安をも抱いていた。彼の前には、望ましからぬ悪しき見本として、《ニジェゴロド通信》の《うちの母さんの息子》が立っていた。この風変りな筆名のもとに、後年の有名な保守派の社会評論家ブラス・ドローシェヴィチ（Влас Доросевич）が、その文筆活動の出発を始めていた。ゴーリキイは、彼の時評のなかに、才能ある人間も往々にして落ちこみがちな地方新聞特有の悪弊を、——読者に媚び、読者に甘やかされ、無責任な放言に終始する傾向を見てとり、こうした陥穽に落ち入らないように強く自戒していた。コロレンコも、その返信のなかで、ゴーリキイの時評文については「私の見るところでは悪くはありません……しかし、やはり事件を偶然的にではなく体系的に選択し、もっと簡潔に、もっと表現力に富む強調された調子をもつようにしなさい。しかし、それにしても、悪くはありませんよ。」と評するとともに、「有名な《息子》の調子は、もちろん、できるかぎり避けなければなりません。彼は疑いなく才能ある人です、しかし、模倣のための手本としてはもう全然無益です。⁽²⁾」とつけ加えている。

コロレンコの適切な忠告と厳正な批判を汲み取りながら、ゴーリキイは社会時評家として急速に成長し、地方新聞のなかにこれまでは見られなかった、新しい要素を注ぎこんだ。ロシア各地の出版が彼に与える豊富な資料のなかから、彼は特別な注意をはらって、勤労者に対する不当な圧迫、専横、搾取を、商店の《小僧たち》に対する冷酷な仕打等々をとりあげ、こうした類の事件を分類しながら、歯に衣させぬ調子で痛烈な批判をおこなった。ゴーリキイによれば、新聞は「はりねずみのようにちくちく刺して」、「金槌のように石頭をぶち砕かなければならない」のである。ゴーリキイの激しい論調は地方都市

(1) «А. М. Горький и В. И. Короленко» М., 1957. с. 26~27.

(2) Там же. с. 30.

の単調な仮睡をゆすぶり覚ました。コロレンコ宛第2信のなかで、ゴーリキイは、彼の時評にたいする反応について次のように報告している。

「きっと、この手紙とともに《サマーラ報知》^{*}をお受取りのことと思います。——私たちの新聞に対する二つの誣告と、ある不幸な売春婦に対してのものが載っています。《C. B.》(サマーラ報知)の出版者は貴族で、地方貴族団長のレウトフスキイです。

こういう大変な奴と悶着を起すのは——おわかりでしょうが——厄介なことです!

県知事のところへ、市長と、それから市会議員の代表でなんだか腹黒そうな男が編集局のことで苦情を言いに行きました。知事はアシェジョフとコスチエーリンを喚んで、おどしました。

あくる日、《C. B.》には同封の誣告が現われました、現在出版事業監督局への然るべき書類が知事によって作成されているところ⁽¹⁾です。」

ゴーリキイは新聞の時評欄を担当するばかりでなく、日曜版のための文芸小品にも責任を負わなければならなかった。当時、地方新聞の日曜版はなにか教訓的な短編小説によって飾られるのが通例であり、それはほとんど不文律のように、万事具合よく、幸福な結末をもつ軽い読物であるのが常であった。

このような日曜文芸欄の読物としてゴーリキイが発表したものはどのような内容のものであろうか?

2月26日、《サマーラ新聞》にゴーリキイの短編小説『結着』(Вывод)が掲載された。この短編の内容となっているのは、戦慄すべき農村の残酷な風習である。——炎天下の、埃りっぽい村の路上を、馬車のながえに縛りつけられた

(1) Горький. С. с., т. 28, с. 8.

*《サマーラ報知》(Самарский вестник)—1883年サマーラ市で発刊された日刊新聞。新聞の出版主は地方貴族団長 Н. К. Реутовский であり、最初は凡俗な市内時報を伝えるにすぎなかったが、1894年末からマルクシストが参加するようになり、1896年末にはマルクシストたち(П. П. Маслов, А. А. Санин その他)によって編集されるようになった。ゴーリキイがサマーラにいた時代、この新聞は、作家の表現によれば、「《イデオロギー的》に相違するというよりは、競争意識で敵対的であるらしい」《サマーラ新聞》と激しい論争をおこなった。(М. Горький. «О Гарин-Михайловском». С. с., т. 17)。

若い、ほとんど裸に近い姿の女が引きずられるように歩いている。馬車に乗った屈強な男が彼女の頭に脊に鞭をふるう。女や子供たちが列をなしてその後につづき、血と泥にまみれた女を嘲笑し、罵倒し、石を投げつける。これは《結着》とよばれるところの、姦通した女にたいする制裁の光景である。

次週の3月5日には、かの有名な『鷹の歌』の初稿である『黒海にて』(В Черноморье)が発表されている。

エメリヤン・ヤロスラーフスキイ(Ем. Ярославский)は後になって——1941年6月18日のゴーリキイ記念の夕において次のように語っている。「1895年、レーニンがペテルブルグで《労働階級解放斗争同盟》を組織していたとき、ゴーリキイはサマーラで、地方新聞に『鷹の歌』を——不撓の斗争へと呼びかける、かつて知らない力にみちた作品を発表した。われわれ、当時の労働運動の参加者は『鷹の歌』を数百万部を刷ったものである。⁽¹⁾」

だが、ゴーリキイの作品が数百万部も出版されたのは20世紀に入ってからであり、この時代、90年代なかばにおいては、ゴーリキイはまだ自分をきわめて孤立した存在と感じていた。彼が働いていたのは、本質的に彼には無縁な自由主義的人民主義者の世界であった。

コロレンコ宛第2信のなかで、ゴーリキイは、編集部の委託を受けて、《サマーラ新聞》のために復活祭特別号の短編を与えてほしいと頼んでいる。しかし、コロレンコは、3月22日付の返信のなかで、「残念ながら、復活祭までにはやはり何も送ることができません、送りたいという気持はあるのですが。しかし、今のところ、私はすでに手をつけた仕事に忙殺されていますし、一般に、復活祭小説をどうしてかずっと前から書かなかったのです。」⁽²⁾と答えている。当時の新聞にとって、復活祭と降臨祭の特別号の小説は不可欠のものであった。コロレンコの拒絶の結果、ゴーリキイに特別号のための小説制作の責任が課せられた。3月31日と4月1日の2日間、彼は《記録と素描》の仕事から解

(1) «Вечерняя Москва», 1941, 19 июня. И. Груздев の論文 «М. Горький в Самаре» に引用されている。

(2) «А. М. Горький и В. Г. Короленко». с. 29~30.

放され、創作に専念することになった。

4月2日の復活祭特別号には、ゴーリキイの短編小説『筏の上で』(На плотах)が掲載された。後年、彼はこの小説の発表の時を回想して、それに《復活祭小説》という副題をつけたことには多分に皮肉な気持があったと語っている。ゴーリキイとしては当然のことながら、たくましい老筏師を主人公とするこの短編には、一般の復活祭小説に共通する感傷的要素がみじんもない。

文芸創作の仕事は新聞におけるゴーリキイの位置をいちぢるしく強化したものである。着任約4カ月目の6月には、彼はすでに《パスカレロ》その他の筆名のもとにかなり大きな諷刺的論文を執筆するようになっている。

ゴーリキイの新聞における仕事にたいして注意ぶかい助言を与える一方、コロレンコはこの才能ある青年を地方紙で朽ち果てぬよう、権威ある中央の大雑誌に発表の機会を与えるよう努力していた。ゴーリキイがまだニージェニイ・ノヴゴロドに滞在中に、コロレンコは彼から短編小説『あやまち』(Ошибка)の原稿を受け取り、それを《ロシヤの富》の編集部に送った。しかし、編集部はコロレンコの再三の催促にもかかわらず、数カ月も放置したあげく、不採用の決定とともに原稿を直接ゴーリキイのもとへ送り返した。

4月12日もしくは13日に出されたと思われるゴーリキイによるコロレンコ宛第3信は次のとおりである。

「尊敬するウラヂーミル・ガラクチオーノヴィチ!

私は侮辱されたらしいので、あなたに訴えたいのです。

今日、《ロシヤの富》^{*}から『あやまち』^{**}を受け取りました。

なんらの説明もなく、原稿紙の上の鉛筆の跡から判断すると、これは3分の1ほども読まれなかったようです。これを読んだ人はきわめて鋭敏な文学的嗅覚をもっているようです、わずか4,5頁だけで原稿が印刷にまったく適さな

* 《ロシヤの富》(Русское Богатство)——1876年からペテルブルグで発行されていた月刊雑誌。90年代初めからこの雑誌は自由主義的人民派の機関誌となり、С. Н. КривенкоとН. К. Михайловскийが編集していた。1896年からはВ. Г. Короленкоが本誌の文芸部門の担当者として編集陣に加わった。

** 《あやまち》(ошибка) Горький. С. с. т. 1 に収録されている。

いと認定するからには。

『あやまち』についてのあなたの評価を思い、自分でもその正しさを確信しつつ、私はこのような判決を信用できません。

私にはこれが誤解のように思えます。

このような粗雑な形式による拒絶が私をどんなに苦しめ、悲しませたか、あなたには想像もできないことでしょう。

ほんとうに、この原稿は欠陥や不適の説明の、2,3言にも値いしないのでしょうか？

あなたはこういう辛い事態を体験したことがおありですか？ 痛いほどだったでしょう——そうではありませんか？ でも、もしそうだとすると、あなたのもとではそういう体験は遠い過去のことでしょうね。

あなたにお願いしたいのです——どうぞ、なぜ原稿が不相当と認められたのか、調査していただきたいのです。『海辺で』^{*}が送り返されたときには、私は何も訊きませんでした。こうした代物を送ったということで恥じ入るのみでした。

どうぞ訊いてみてください、ウラヂーミル・ガラクチョーノヴィチ。

あなたのA. ペシコフ⁽¹⁾」

コロレンコはゴーリキイの依頼をただちに実行した。4月15日、彼は《ロシヤの富》の出版者で編集者のミハイロフスキイ (Н. К. Михайловский) に次のように書き送った。

* 『海辺で』 (У моря)——印刷されず、原稿は保存されなかった。1933年4月10日。この短編小説についての И. А. Груздев の質問に答えて、ゴーリキイは述べている。「短編『海辺で』はおそらく印刷紙2枚(つまり32頁)ぐらいのものです。《ロシヤの富》編集部は原稿を返してくれなかった。В. Г. Колоренкоはやはりこの小説には冷淡な態度を示しました。ヤーコヴィチが1901年か2年に私に言いました、私の原稿を見つけて読んだが、これは彼の気に入った、しかし、そのなかでは農民にたいして《浮浪人》をあまりに露骨に極端に優越させて描いている、と。原稿を返すと約束したが、忘れてしまいましたし、私もよく記憶していません。15年か16年に私はこの短編の下書きを何枚か発見し、それで『陽気な男』(С. с. т. 14に収録されている——松本)をまとめました。」

(1) Горький. С. с., т. 28. с. 10~11.

「……以前に短編小説『チェルカッシ』^{*}を採用したことがある A. M. ペンコフが私に懇願しています。彼は『海』を送りましたが——失敗作でした、その後私は彼の短編小説『あやまち』を送りました。数日前に原稿を送り返されて、彼はひどく悲しんでいます。私はその『あやまち』を読んでいたのだから、彼にはこのことに関して不採用の理由について自分の見解（仮説的な）を書いてやりました。しかし、回答なしで送り返されたことが、とりわけ、彼の心を傷つけています。私に宛てて、たとえ2,3言でもいいから、一筆くださると幸甚です。私はあなたの拒絶の理由を推察できると思いますし、これは彼を納得させるでしょう、でも、それにしても、彼は若干の注意に値いします。……私が『あやまち』を送ったのは、これは才能が光り、例外的な題材ではあっても、力強く書かれているからです。⁽¹⁾」

同時に、コロレンコはゴーリキイにたいしても、次のように書き送った。

「尊敬するアレクセイ・マクシモヴィチ。

あなたの希望に副いましょう；つまり、この手紙と一緒に、H. K. ミハイロフスキイに、短編小説『あやまち』についておよび拒絶の理由について数言言ってくれるようにと書いているところです。あなたに言わなければならないのですが、あるいは、もっと正確に言えば、繰り返さなければならないのですが（というのは、以前にもこのことを言いましたので）、私の考えでは、短編は力強く書かれています、しかし、《ロシヤの富》編集部の拒絶は、私をあなたほどには驚かせません。短編の若干の《重苦しさ》、いわば、ある程度動機づけに目的性がないという欠陥を見て、こうした結果の生ずることを私は怖れていたではありませんか、もしも記憶しておいでなら、当地の広場を二人で歩いたときに、私はあなたにこう言ったはずです。もちろん、私はこのことを編集部には書きませんでした、やはり私は短編が印刷されるよう望んでいたのです。しかし、この領域における H. K. ミハイロフスキイの見解を知っているのだから、あなたの作品のこの面が妨げになるかも知れない、と私は心配して

(1) В. Г. Короленко. Избранные письма, т. 3.

* 『チェルカッシ』小樽商大人文研究第20輯 101 頁参照。

いました。彼は短編全体に目をとおしたと思います。そして、あなたは私が付けた印しを見たのではないかと、懸念しています。なぜなら、私は短編を二通りの方法で見たからです。一度は鉛筆を持って、もう一度は鉛筆を持たずに寝台の上で。いずれにせよ、批評を頼んでみます。編集部に腹を立てたり、あまり責めたりしないでください。彼らがどれほど仕事をかかえているか、想像もできますまい。短編は無駄にはなりませんよ。ほかの雑誌に送るなら、ほとんど確実に掲載されます^{*}。もしも、あなたがミハイロフスキイの《苦悩の天才》^{**}（ドストエーフスキイ論）を読まれるなら、彼がドストエーフスキイにたいしてさえ、論理的・心理的必然性を必らずしも認められない彼の形象を許すことができないことを知るでしょう。あなたのあの短編には同じ要素があります。あなたは、気が狂いはじめている人間をとりあげ、彼をすでに発狂してしまった人間と並べている。ここから原因が生ずる軋轢は完全に例外的なものとなり、重苦しい授業の場面に教訓は不均衡であり、そして形象と行動は——あのように怖ろしい心理的袋小路にひしめく、この袋小路は、なぜこれがこんな袋小路であって広い道でないのか、必らずしもすぐに理解されるとは限らないのです。《救護室》は——すこし無理が感じられるし、精神病（すなわち《救護室》）に至る不可避的連鎖の一環とはなりません。全体として、ガルシンの『真紅の花』^{***}を思い起させます、そこではこの気分の形態が異常な浮彫的造型と迫力とをもって描き出されています。こうした一切を私がこれほど詳細に書いているのは、私が口頭で伝えた評価のなかに、あなたは、どうやら、私の指摘したこの側面に注意を向けていないようですし、第二には、さらに（私が理解するような）失敗の原因を説明するためです。原因の発生するところは芸術の課題にたいするミハイロフスキイの見解にあります、彼に罪を負わずわけにはいかないのです。それから、今一度繰り返しますが、もちろん、短編は力

* 短編小説《Ошибка》は雑誌《Русская Мысль》1895年第9巻に掲載された。

** コロレンコは《Мучительный талант》と書いているが、ミハイロフスキイのドストエーフスキイ論は《Жесткий талант》（残酷の天才）である。

*** 《Алый цветок》とコロレンコは書いているが、これは В. М. Гаршин の《Красный цветок》（赤い花）をさす。

強く書かれており、あなたの他の多くの短編よりずっとよくまとまっています。これは採用されると思います、その例外的な主題をこの短編はやはり明晰かつ正しく発展させています。⁽¹⁾」

コロレンコの手紙にたいして、彼の配慮と助言を感謝しながら、ゴーリキイは4月20日頃の第4信のなかに「前便の失礼をお許してください。原稿をもどされたことでひどく気が滅入り、極度に重苦しい気持ちのままに、悲しみに酔ったように書きなぐってしまいました。⁽²⁾」と詫びている。しかし、ちょうどこの時期、4月18日付の《サマーラ新聞》の《記録と素描》欄で、ゴーリキイがミハイロフスキイのネクラーフ論をとりあげ、《偉大な人々がいかに論争するか》(Как ссорятся великие люди)の見出しのもとに、彼の論文にたいしてかなり強い調子で否定的見解を表明したことから、⁽³⁾コロレンコのなかにあらぬ疑念と危惧をよび起すに至った。

4月23日、コロレンコはゴーリキイに宛て次のように書いた。

「……昨日、H. K. ミハイロフスキイから手紙を受け取りました。彼はまったく仕事で手がふさがっています。概して——彼の批評は、私がすでに書き

(1) В. Г. Короленко. Соб. соч. т. 10. с. 225~226.

(2) М. Горький С. с. т. 28, с. 11.

(3) «Как ссорятся Великие люди» のなかには、次のような一節がある。「……金のために仕事をしたが、そのことで不滅の傑作を創造することを妨げられなかつたところの、バルザックについてのフランス人たちの伝記的評論を手にして、ネクラーフについてのロシヤ人の回想記と比較してみたまえ。前者において、主として文学者バルザックについて書かれているのを諸君は見るであろうし、後者においては、賭博好きで、海狸の毛皮の襟のついた外套を着ているネクラーフについて語られていることが明らかとなる……諸君の眼にいきなり飛びこんでくるのは、回想の対象である人物の性格の暗い、不快な面について公衆に語ることを忘れまいとの願望である。そして、これは H. K. ミハイロフスキイのごとき、巨大な疑いなく高度な精神文化をもつ人にさえ見られるのである。慣例か！ だが、公衆にとっては指導者にたいするこのような態度が、どうやら、気に入って、いい気持ちができるらしい。なぜなら、公衆は彼にたいしてかって一言も抗議しなかったし、抗議していないから。この墓あばきは、そのなかに巨大な人物ではあっても、心に汚点がないわけではない人物が横たわっていることを思い起こさせようという目的のゆえに、公衆にとっては気持ちがいいのだ。われわれはほかならぬ心の汚点について想起させようという目的をもって語っている、なぜならこの似非考古学のなかに他の目的を見ることができないから。衰れなロシヤの巨人たち！ みじめなロシヤの公衆！」

送ったのとほぼ一致します。あの短編小説は目的性がなく、二人の狂人の心理は作為的であると、彼は見えています。『チェルカツ』は、きっと、9月の小冊子に載ります。《作者は疑いなく才能をもっている、——とミハイロフスキイは書いています、——力強い、しかし、うつろな空地で腕を振り廻すことは、力強いものがあるとはいえ、意味がない。》彼はあなたが若干の作為性、冗長さ、《デカダン派の徴候》（『海』や『あやまち』のような）を脱却するようとの希望を表明しています。ミハイロフスキイの返事はこうです、——彼はつねに若干厳しすぎるが、そこには多くの真実があります。

ところで、あなたはこの厳しさのゆえにミハイロフスキイにたいしてすでに先入主をもっておいでですね。実をいうと、私は、あなたがミハイロフスキイについて書いたことを、すこし悲しい気持ちで読みました。《ロシヤの富》編集部にたいするあなたの個人的不満と時を同じくしたのですから、なおさらのことです。一般的にも（社会的活動家の生活は、これに反対して何とも言うがよいという形をとるものです）——特殊的にはネクラソフに関するミハローフスキイの論文^{*}にたいする態度においても、あなたは完全にまちがっていると、私には思われるのです。ミハイロフスキイが、あなたの述べているような、あの伝記的特徴を発掘したのではありません。このことについてはすでに完全な文献^{**}があります。ミナーエフ^{**}がかってほかならぬこのテーマへの皮肉な《パロディ》^{***}を書いたし、ジュコーフスキイとアントーノヴィチ^{***}がネ

* ミハイロフスキイのネクラソフについての回想記は《Литература и жизнь》の表題で《Русская Мысль》誌1891年第4巻に掲載された。

** ミナーエフ（Дмитрий Дмитриевич Минаев, 1835~1889）——詩人、翻訳家、《Искра》の協同者、コロレンコがいうネクラソフへの《パロディ》とは、Минаевの詩集《Поэмы и песни》（СПб. 1869）のなかにある《Песня Ериушки》のことである。

*** ジュコーフスキイとアントーノヴィチ——Жуковский Юрий Галактионович（1822~1907）と Антонович Максим Алексеевич（1835~1918）は雑誌《Современник》の協同者、コロレンコは、アントーノヴィチの論文《Литературные объяснения с Некрасовым》とジュコーフスキイの論文《Post scriptum. — Содержание и программа «Отечественных записок» за прошлый год》が収められている、《Материалы для характеристики современной русской литературы》（СПб. 1870.）を考慮している。

クラーツフに反対するパンフレットを書いたし、数多くの卑劣な攻撃があったのです。ミハイロフスキイは、これを否定するか、あるいは故ネクラーツフの肖像からすっかり手を引くかしなければならなかった。前者は嘘になるであろうし、後者は中傷に自由な場を与えることになる。彼は第三の道を選んだ——彼はあえて真実を認め、故人の記憶を彼の活動の他の側面によって擁護したのです。いずれにしても、否定的側面の無益な《発掘》への非難は全然的はずれです。繰り返していいますが、あなたの記述のこの場所に出会うのは私としてはとても不愉快でした、とりわけ現在⁽¹⁾。」この書簡にはさらに次のような追伸があり、コロレンコはゴーリキイに文筆人としての自重を求めている。「追伸。ささやかな忠告に腹を立てないでください、いわば、*a propos* です。私はすでに新聞に10年間も執筆しています。そのあいだには幾度も個人的性質の出版物による攻撃をよび招くことになりました。私は活字になったことを悔いる気持ちになった場合のことを記憶していません。編集部へ送る前に、私はいつでも、私が書いている人を目の前に浮かべ、印刷に付そうとしていることの内容を彼の目の前で語っているように想像をめぐらしてみました。もしも、想像力がすべてを喜んで繰り返すだろうし、ときにはもっと激しく言いさえするかも知れない、とささやくなら、——私は原稿を送りました。もしも、反対に、面と向かったなら、あれこれ柔らげるとか、打ち消したい気持ちを感じたなら、——私は即座に修正しました、なぜなら、印刷物においては、個人的関係におけるより以上に正当さ、慎重さ、デリカシーがなくてはならないからです。」

この手紙への返信において、ゴーリキイはコロレンコの忠告に深甚の謝意を表するとともに、自分の本意を説明し、さらに、ミハイロフスキイの見解にたいする反論については安易な妥協を許されない文学上の論争として自分の見解を強く主張している。すこし長いが全文を掲げよう。

「貴翰拝受。心からお礼申し上げます、ウラデーミル・ガラクチオーノヴィ

(1) В. Г. Короленко. соб соч. т.10. с. 227~228.

チ。あなたが私をよく見てくださって、こんなによく、こんなに率直に私の誤謬を指摘する労をとってくださって、私は嬉しくてなりません。

とはいえ、この場合——私の誤謬は、私が論評を植字から外さなかったという点にのみあるのです、あのような形であの論評が現われたのは、《ロシヤの富》からの手紙を私が受け取った翌日でした。新聞の大組版割付のさいには私は編集部にはいませんでしたし、ソログープ、パナーエフ、ゴロヴァチェワおよびシェルグーノフの回想^{*}の引用文を含むゲラ刷りを検閲が抜いてしまったことを知りませんでした。

そんなわけで H. K. (ミハイロフスキイ——松本註) 一人だけが残され、なんともばかげたことが——あなたが指摘されたような性の悪い性質のナンセンスがもち上ったのです。

しかし、B. Г. (コロレンコ——松本註) 信じてください、H. K. の引用は《P. B.》(ロシヤの富——松本註) 編集部への私の不満によってよび起されたものではありません。

だって私は、彼が『あやまち』を読んだことを知りません、——反対に、私はその正反対を信じていたのです。《P. B.》からの手紙にはトボルニコフとかいう人の署名があったからなおさらです。あなたの軽蔑が私には耐えられません——それを取りはらってください——誓って申し上げます、私の良心には曇りがないのです。

そして、問題の本質に関して数言述べさせていただきます。

《社会的活動家の私生活は、これに反対して何とでも言うがいいという形をとる》とあなたは書いています。私の考えでは、悲しい事実です。神への勤行の秘儀を群衆から隠蔽した古代の僧侶たちは、公衆の面前でたがいに相手の着

* ソログープ、パナーエフ、ゴロヴァチェワおよびシェルグーノフの回想——1) «Воспоминания графа Владимира Александровича Сологуба» СПб, 1887; 2) Панаев И. И., «Литературные воспоминания и воспоминания о Белинском». СПб. 1876; 3) «Воспоминания А. Я. Голвачевой (Панаевой)» («Историческом вестник» 1889. No. No. 1~3. に所収); 4) Шелгунов Н. В., «Воспоминания», «Собрание сочинений» 第2巻, СПб. 1891, .

物を剥ぎ合うわが文学者たちよりずっと炯眼であった。公衆の手のなかにある作家の汚れた下着——これは本質的に作家の理念と活動にたいする公衆の抗議です。公衆は卑劣です、そして、公衆にとっては、彼の教師や判事が自分自身悪党で未熟であることを指摘することが大いに好都合なのです。

さらに、活動家の私生活の研究は——私にとってはつねに理解しがたく、生活における彼の役割りと彼の影響の度合の解明には不要の問題でしょう。わが国の《文学的回想》の性格こそが——私の見るところでは完全に節度を失っています。回想記作者は故人の額にしばしば烙印を押します。こんなことは無益です。生活——この場合には正当です、生活自身が彼に烙印を押すことが必要です。

だが、公衆、公衆による裁判は——失礼ですが——私の眼にはこれは無価値なものです。まさに私自身もまた《公衆》です。それにもかかわらず、私は彼らが嫌いです。ときどき、公衆の深奥部から——その腐敗した深奥部から——声が上がります。あなたは、きっと、そういう声をよくご存知でしょう。現にそうした二つの声がいま私の机の上にあります。一つはほかでもない H. K. について語っています。まず第一に、H. K. は著録して、自分で自分の《予言》のなかに踏み迷った、——《読者》という署名のある、生っかじりのマルクシストらしい人物のものである声はこう語っています。それから、H. K. はウォットカを飲む——著者自身がペテルブルグの面会日に彼が酔っぱらっているのを見かけた。あらゆる酔いどれと病人の役割りは無条件に害悪であると、ノルダウ^{**}が証明したとか。そして、それゆえに——マルクシストについて H. K. が書いていることをどうして信ずることができよう？ 彼は著録して、アルコールに浸されている。誓って申し上げますが、これがこの論文のほんとうの意味なのです。この論文は、ベリトフ氏と K⁰^{***} が文学にもちこんできた、あの広場の言語で書かれています。これは卑劣で、汚らわしい。

もう一つのろばの足蹴はキエフ出身のリューチ氏という人物のものです。

** Nordaw Max (1849~1923)——ドイツ作家。

*** ベリトフ氏と K⁰—Бельтов は Г. В. Плехонов の筆名、K⁰ は不明。

こちらはすこしばかり清潔で客観的であろうと努めています。彼は攻撃しています——H. K. ばかりでなく、トルストイとチェーホフにも、イワノフとプロトポポフにも喰^{**}ってかかります。すべてこれからの人々は《公衆をあざむき》、彼らは《ずっと以前に自己と真理への信頼を失った》、そして《冷淡な、偽りの言葉によって生活から消え失せた理解と、生活に見切りをつけられた理念について語っている。》と。

いかなる思想がこの紳士をしてこんな悪ふざけを書くように仕向けたのか、私は知りません。私が見るのは思想ではない——見るのはただ何かのために人々を侮辱しようという願望のみです。だが何のためにか——やはり知りません。これはすべて卑劣です。

とくに H. K. について。彼のネクラソフ論のなかで私を腹立たせたのはこのことです——彼は論文においては冷淡で、節度がない。《わたくし、ミハイロフスキイの若い魂にネクラソフによって加えられた侮辱》——かれ、ミハイロフスキイが、かれ、ネクラソフについて語る到るところに、これが透けて見えます。彼は《ネクラソフの私生活が私を困惑させた》と告白する。何のために彼はネクラソフの敵たちに反対しながら、このことを告白するのか？ 概して、何のために彼はあれこれと告白するのか？

そのような告白は——かれ、ミハイロフスキイをよく描いているけれども、ネクラソフの魂のまわりにいっそう濃い影を落とすことになります。

私の心を傷つけたのはこの調子です、私はそれを意識しつつ、論評を書きました。わが文学においては似非考古学が慣例となって、ミハイロフスキイさえそれを避けなかった、と私は述べました。

お許してください、私はあなたをうんざりさせていますね？ よしましょう。

親愛な B. Г., 私の H. K. にたいする反対行為が故意のものであるとの疑

* イワノフ (Иванов Иван Иванович—1862—1939)——文学史家、批評家、後に反動家となったが、当時は自由主義的傾向をもっていた。

** プロトポポフ (Протопопов Михаил Алексеевич—1848—1915) 自由主義的傾向の文学批評家。90年代に《Северный вестник》、《Русское Богатство》、《Русская Мысль》で活動。

念を取り除いてください。もしあなたが取り除いてくれないと、私は苦しくなるでしょう。ほんとうに、私はそうした処罰に値いしないのです。これは死刑です——なぜならこれはあなたから出たのですが、私はあなたを敬愛し、私にたいするあなたの態度を大事にしています。私はとても孤独で、人生への理解が足りません、あなただけが私に親切な態度を示してくださっています。そして私は、私にたいするあなたの見解が損われることを怖れます。それを、あなたの見解をよく知らないのですけれど。

さようなら。御家族によろしく。

あなたのお写真を待っております。

あなたを尊敬するA. ペシコフ⁽¹⁾

ゴーリキイのこの手紙を読んで、コロレンコは、5月12日付の返信のなかで、ゴーリキイによるミハイローフスキイ批判の執筆の動機にたいする疑惑を「大いに喜んで撤回する」と述べている。しかし、問題の本質に関しては、「故人の私生活上の欠陥を発掘することには問題があるが、一般に周知の、印刷物によって検証された事実眼をふさぐことにはもう一つ問題がある」、さらに、ペーコンを例にとって、「哲学は彼に一般的沈黙を要求する権利を与えない」として、コロレンコは自分の見解を保持する旨を表明している。ここに現われているゴーリキイとコロレンコの見解の相違は、ゴーリキイのその後の成長とともに、両者のあいだにおける思想および文学創作・評価の諸原則に関する大きな相違に発展してゆく。しかし、それは90年代来以降のこと。いまはコロレンコの手紙にもどらなければならない。コロレンコは、ゴーリキイの手紙のなかにある彼の《公衆》にたいする態度に注目した。

「……あなたはなんだか元気がなく、お手紙のなかでサマーラの住民を一括して罵倒していますね。およしなさい、アレクセイ・マクシモヴィチ。どこにでも人はいます、どこにでもサマーラにいるのと同じ人々がたくさんいます。そのかわり、サマーラのなかにも、よく注意してごらんくださいよ、ただし

(1) A. M. Горький и В. Г. Короленко. с. 36~38.

——私とあなたの救いになるような人間がいます。しかも、多数のなかにも、非常に、非常に多くの尊敬すべき人々が散在しています。だが、重要なことは——多数とはそういうものであり、そういうものとしてとらえ、この社会のなかで自分の仕事を自分でおこなう必要があるのです。あまり多く語ることは、ときとして、なにも語らないに等しい。環境を非難することは——同様に、風に向かって言葉を投げつけるに等しい。もしもあなたが時折忠告せよというのなら、印刷物においてもこの調子を避けるよう、私は心から忠告いたしたい。私とあなたは、他の人々のあいだにあって、邪悪な考えをもつ人々に反対し、立派な考えをもつ人々のために斗かいつつある人間です。他の人々は別の環境のなかで同じことをしています。新聞を残余の世界に、自分を俗世間に対置してはいけません、一般にそういうことです。こうした一切はきわめて緊密に結びついています。皮肉、諷刺、不満さえ——これはすべて当然の武器ではあるが、このすべては一定の場所⁽¹⁾に命中させ、過度に広く散らばさないようにしなければなりません……」

コロレンコのこの手紙へのゴーリキイの返信は、1カ月半後の6月23日になってから書かれているが、この間の事情はゴーリキイが5月20日頃にニージイ・ノーヴゴロドに3日間滞在したことによって説明されよう。彼はコロレンコを直接訪問し、度々の貴重な助言について謝意を述べ、さまざまな問題について意見を交えることを企図していたものと思われる。しかし、ニージイ・ノーヴゴロドに彼が滞在したのは、「3日間だけで、とても忙しい、厄介な仕事」があったので、コロレンコ訪問は実現しなかった。

上述の手紙のなかで、ゴーリキイは書いている。

「多分、あなたは《C. Г.》のなかでパスカレロという署名の三つの評論をごらんになったでしょう。——これは全部罪深い私なのです。

私は、そのなかで、地方新聞を知ることによって得た一切の事柄を、心をこめて、率直に書きたかったのです、新聞の致命的なディレッタンチズムとそれが社会に及ぼす悪影響を指摘しようとし、恐ろしいほど多くの、使命感をもたず

(1) В. Г. Короленко, С. с. т. 10, с. 229~230.

——これはまだいいほうですが——誇りと良心をもたない人々が——これは正に恐ろしいことですが——新聞のなかに這いずいこんでいることを指摘したかったのです。そして、私はすでにわが国の新聞界のなかに多くの悲しむべき事実が存在するのを見ています。私にとってこれは不思議なことです、私はこれをあえて新しい形式で——《古い形式》だともっといいのですが、——述べることを意図しました。しかし、私の意図はよかったが、作品は駄作になりました。

検閲がそれを削り、編集者が縮めました——全体の調子をくずさぬようにとの配慮から、重要な部分を多く縮めてしまったのです。⁽¹⁾

ここでゴーリキイが述べているのは、パスカレロの最初の仕事で、6月4日ないし20日に4回連載された諷刺的論文《地方新聞編集者の役をした数日間、(機智にとむ人々のためのすてきな主題。アメリカ語からの翻訳)》についてである。《古い形式》という言葉は、おそらく、19世紀後半の偉大な諷刺作家シCHEDリンの作品、とくに『ペテルブルグの田舎者の日記』を意味すると思われる。シCHEDリンの作品には夢のなかで大金を儲け、死にかけ、せっかく手に入れた金を盗まれる夢を見るという主人公が登場するが、ゴーリキイの作品には、夢ではなく現つに死にかけている地方新聞の編集者が登場する。この形象を通じて、ゴーリキイは、地方新聞界が内包する諸欠陥を諷刺の形式をもちいて徹底的に批判した。検閲によっていちぢるしく削除されたとはいえ、この作品は地方新聞界に大きな反響をよび起こすに十分な諷刺の牙をもっていた。

パスカレロの諷刺のなかに《サマーラ報知》の時評家スフィンクス⁽²⁾は、自分にたいする攻撃を読み取って、彼を流し音楽師、犬使い芸人、石切人足と嘲けると同時に、《サマーラ新聞》の執筆者全体をひっくるめて、次のように罵倒し

(1) А. М. Горчкий и В. Г. Короленко, с. 40.

(2) スフィンクス (Сфинкс)—А. К. Клафтон の筆名。Клафтонは《Самарская газета》の記者であったが、Ашешов がこの新聞の編集者になってから、《Самарский вестник》に移っていた。

た。「彼らは社会的事件の汚れを清めるところか、自分でそれを汚し、しかも自分の泥まみれの裏面まで示している。」⁽¹⁾ パスカレロがゴーリキイの筆名であることを知ると、スフィンクスは、ゴーリキイの短編『筏の上』にたいしても攻撃を向け、この作品を「彼の筆になるところの、《サラマンドラ》⁽²⁾紙に掲載された、《他人の女房にたいする筏の上の恋》という嫌ったらしい精神の文芸」とこきおろし、作者を《デカダン派》と呼んだ。

ゴーリキイは先に引用したコロレンコ宛の書信のなかで、次のようにつづけている。

「……ちょうどこの時、《サマーラ報知》が私、アシェショフ、ブラーニナおよびグーセフをととても卑劣に乱暴に攻撃しました。そこで私は愚かにも仕返しをしました。昨日、こんどは、彼らが私に報復しました。

そんなわけで、私は一切の《論争》慾を失いました。それは私のなかから叩き出されてしまったのです。いい勉強になりました、私はそのことを忘れないでしょう。こういうことはすべて粗野で汚らわしくおこなわれています。

ご存知でしょうか？ かって《サマーラ新聞》と《原則的》に縁を絶った紳士たち、クラフトン、ツィムメルマン、グリゴリエフ、それにチリコフさえそうだというのですが——《報知》に協力しています、——まったく、卑劣なあの新聞に！……ああ、彼らは私たちに論争を吹っかけるのです、アシェショフをバラライキン（^{バラライカ}三弦楽器ひき）とよび、彼が《何回裁判にかけられた》といった類のことをと書き立てながら。グーセフにも暇なしに突っかかっています。」《サマーラ報知》との論争はよほど彼の神経を消耗させたものと見え、この手紙の末尾のほうに、ゴーリキイは、コロレンコが近くペテルブルグに去るであらうと予想しつつ、「そうなると、おそらく、私はもう二度とお目にかかれ

(1) Сфинкс の фельетон «Маленький фельетон. Самарский картинки» 1895年6月4日付116号より。(В кн. «А. М. Горький и В. Г. Короленко» с. 232—233)

(2) 《サラマンドラ》(Саламандра)—《Самарская газета》をもじっている。中世、迷信の火の精という意味があり、ここでは騒ぎをおこす火元という意味がこめられているのであろう。

ないでしょう。なぜなら、きっと、私はどこという当てもないけどロシヤから逃げ出すでしょうから。」と書いている。

ゴーリキイの手紙のなかに憂慮すべき危険な徴候を見てとったコロレンコは、《ロシヤの富》に採用された『チェルカッシ』の校正刷りとともに長文の手紙を送って、彼を強く批判した。

「……あなたの（きわめて元気のない）手紙を受け取りました。異論を二つ述べさせてください。第一に、あなたが書いていることを、あなたの隠気な調子も、あなたがそれによって地方の新聞界と社会とにたいしている絶望的ペシミズムも全然正当化できません。もしも、それこそ《心をこめて、率直に》問題を見つめるならば、数人のしっかりした人々が、《サマーラ新聞》と別れてから、群をなして《サマーラ報知》に協力してはじめていることがお分りでしょう。彼らは新聞を改善しようと望んだのではありませんか？ 疑う余地がなく、そうでなければ、たとえばチリコフは新聞に入らなかったでしょう。私は彼のそういう一面をよく知っています。ほかに何をいうことがありましよう？ 彼らが《サマーラ新聞》と論争している。非常に遺憾です。あなたが触れている論文を私は読んでいませんが、いずれにしても、この論争を私は悲しむべきものを考えます。しかしながら、はたして彼らにのみ罪があるのでしょうか？ はたして《サマーラ新聞》の各号に《サマーラ報知》にたいして含むところがなにもないのでしょうか。彼らは、あなたによれば、《卑劣な新聞》になったと非難されています。私にとって——彼らがそこで働いている現在、それが卑劣だとは問題です。だが、もしも過去だとか出版者によってのみ判断するのであれば、プロホフシチコフ^{*}は相当な無頼の徒ですし、《ロシヤ生活》は初めは——まったくの醜態でした。そして、しかも、これはそのなかにすぐれた人々が一团となって入ることを妨げなかったし、現在では、どんなにしても、《ロシヤ生活》の名をロシヤ新聞出版史から抜くことはできません。この観点からすれば、つい最近、あなたは《ヴォルガリ》^{**}で仕事をすべきでなかったでしょうし、A. A. ドロブイシ^{***}は《時報》で、等々、等々。何をなすべきでしょうか

* プロホフシチコフ (A. A. Проховшиков—1890~1895年にペテルブルグで刊行)

——地方文筆人はまだ当分はもっとも俗悪な投機的出版の砂漠を彷徨し、自分の都を求めるイスラエルの民なのです。今しばらく——彼は一軒一軒戸をたたかなければならない、そして、私の考えでは、もし人々がサークルに入って、仕事の場において卑劣さから身を守るように誠実に決めるなら、——これで充分です。われわれがよく注視しなければならないのは印刷紙のみであって、出版者の醜い顔ではないのです、——なぜなら醜い顔でないものはすくない。そして、その後に、隣り合う陣営に立つイスラエルの各隊がやたらにたがいに飛びかからないようにする希望が残ります。しかし、そのためにはみんながつまらぬ計算を捨てて、非常に重大な問題として論戦を見つめ、つねに問題の本質からいって必要である点のみに論議を向けなければなりません。私には、地域の住民もまた自分の人格への尊敬を、多くの場合われわれの仲間が彼に示しているよりも以上に期待すべき権利をもっていると思われまゝです。仲間同士は言うまでもない。《サマーラ報知》がこの規準にたいして強く非難したということは大いにありうることです（私は読んでませんが）、しかし、すべての泥をそっちへ運んで、《新聞》の側にはすべての明かるいものを残しているとき、あなたははたして正しいでしょうか。《誠実謹厳》はこういうことになります。ちゃんとした人々が仲間勘定から分裂し、自分の力と筆とを向けなければならないような対象と人物がこの世に存在することを忘れて、たがいに戦闘を始めます。

私の第二の異論は——*pro domo*。私とあなたはペンによる同志です、おたがいに儀礼的に示されるどんな《敬意》も、一言でもあってはならないはずで。だが、それにしても、この言葉があなたの手紙のなかにあつて、ひどく私の心を傷つけましたよ。どこでこんな言葉が見つかったのですか、合点がいきませんね。まあ、いいです。

お元気で。上に述べた観点から物事を注視してごらんなさい、多くのことが単純化します。人生は暗い、しかしもっと暗かったこともあります。だが、もしも時とともに明かるくなってゆくのなら、意気消沈と嫌人症によってではなく、活動的な努力によって現在の社会のなかで何をかなすべき可能性があるの

です。⁽¹⁾」

6月、アシェンコフはサマールラからニージニイへ去り、С. グーセフは《オデッサ通報》に移ってオデッサへ去った。僚友たちの去った《サマールラ新聞》にゴーリキイはただ一人、この新聞の唯一の積極的ジャーナリストとして残ることになった。グーセフが去ったあと、彼が担当していた《ちよっと一言》(Между прочим)の論説欄がゴーリキイに委ねられることになった。こうして、彼は《記録と素描》のほかに、この欄を担当して、《イエグディル・フラミーダ》(Иегудиил Хламида)の筆名のもとに、いっそう活潑な、精力的な評論活動を展開するのである。フラミーダの活動に検討を加えなければならない。

(未完)

(1) В. Г. Короленко, С. с. т. 10. с. 230~231.

* された新聞《Русская жизнь》の編集兼出版者。《Русская жизнь》は95年1月政府によつて閉鎖された。

** 《ヴォルガリ》(Волгарь)——ニジェゴロドの新聞。最初は君主々義的精神において商人 И. А. Жуков によつて刊行されたが、1901年彼が死ぬと、息子の С. И. Жуков によつて継続され、С. И. は新聞に進歩的な働き手を集めた。

ゴーリキイは1893年10月から翌年7月まで定時寄稿者としてこの新聞で働いている。この間に、彼はこの新聞に次の作品を発表している：1993年10月—《Нищенка》11月—《Нищенка》(後半)、《Исключительный факт》、12月—《Сон Коли》、《Убежал》、1894年2月—《Пробуждение》、《Дед Архип и Ленька》、4月~7月—《Горемыка Павел》(ゴーリキイの最初の中編小説)。

*** А. А. Дробыш (Алексей Алексеевич Дробыш-Дробышевский — 1856~1920)—ジャーナリスト、翻訳家。1894年に《Нижегородский листок》の編集者になり、1895~1896年には、Ашешов がサマールラを去った後、《Самарская газета》を編集した。政治流刑で、コロレンコと同じ時期にトムスクに送られた。